

3月8日(日)

## 平標沢

メンバー……山崎、手塚

土曜の夜に出発し、越後湯沢駅に泊まる。正確に言うと、湯沢駅は最終列車通過後完全に閉鎖され、私達は野外に締め出されてしまう。一際冷込みの厳しいこんな夜に私達が路頭に迷うという事が分かっているながら、極めて事務的に退去させるJR職員は、人道よりは規則を優先させている。彼の国では、法に従って殺人をした人が、法よりは良心に従って行動すべきだったとして、断罪されているというのに。くどいようだが、その夜は本当に寒くって、野外に寝るにはためらわれ、困った、困ったとウロウロしているうちに、いい場所が見つかり、とにかく建物の中にシュラフを広げる事ができた。(その場所を知りたい人は、口頭でお教えしますので、お申し出ください。) 久々に神様に感謝した私だったが、建物の中でも結構寒くて、山の上でもああ寒い晩はそうないだろうって位だった。

早朝、タクシーで火打峠に入る。シュプールを辿って林道の終点へ、そこから尾根伝いに平標の稜線に登る。昨夜の冷込みで雪面は極めて固く、私は早々つば足に切り替える。稜線に出ると傾斜はかなり緩やかになるが、雪面はますます固くなる。無色透明の氷の粒々が表面を覆い尽くして、あそこでやるならスキーよりはスケートの方がましって感じだ。山頂では松手山の方から登ってきたパーティーと一緒にいるが、あの人達いったいどこ滑るんだろうと、人事ながら心配してしまう。そんな事より心配すべきは我が身の事なのだが、この雪面では滑るに滑れず、尾根伝いにしばらく下降して、日白山への稜線が分かれる辺りから、平標沢に滑り込む事にした。稜線から臨む平標沢は、灌木に覆われていて何か冴えない感じだったが、こんな固い雪の時は、怖さが半減していいもんだ。滑り初めは氷の粒々の余韻が少し残っていて緊張したが、沢に入ってしまうえば深雪で「もうこっちのもの」って訳だが、要所要所にアイスバーンが露出していて、そうそう快適には滑らせてもらえない。傾斜が少し緩んでからは、アイスバーンも姿を消し、回転しやすい深雪を堪能した。晴天下、でぶりの後の全く無い純白の斜面を独占して滑るのは何とも爽快だった。しかし、傾斜が無くなると、雪も重くなり、滑らなくなり、時間がかかる。群大ヒュッテ前の壊れた吊橋を渡るのが嫌だなあと思うあまり、右岸にルートを取ろうとスノーブリッジを渡ったり苦勞したが、徒勞に終わった。吊橋は改修されて、難なく渡れるようになってしまっていた。群大ヒュッテからの林道は、トレースもありはかどったが、土樽駅への道路にでる辺りで何となくトレースについて土樽の集落の方に行ってしまう、時間をくってしまった。ここは、毛渡橋目指して真直ぐに下らないといけない。経験が何にも生きていないと反省しながら、倍にも増えた駅までの道程をとぼとぼと歩いた。

[手塚 記]

[TIME]

5:55	7:05	9:35	10:40	11:30
火打峠	— 林道終点 —	稜線	— 平標山頂 —	下降点 (1890M) —
				12:00

道路 (滑降終了)	— 土樽駅
15:50	16:35

